2020 年度 若手・女性研究者奨励金 レポート

研究課題	**小規模単科大学におけるガクシュウ（学習・学修）支援の研究** **―大学生活４年を通したガクシュウ（学習・学修）支援の方法―**
キーワード	①初年次教育、②リメディアル教育、③キャリア教育

研究者の所属・氏名等

フリガナ 氏　名	アオノ　ミユキ 青野　美幸
配付時の所属先・職位等 （令和２年４月１日現在）	京都医療科学大学　医療科学部　放射線技術学科　助教
現在の所属先・職位等 （令和４年７月１日現在）	京都医療科学大学　医療科学部　放射線技術学科　講師
プロフィール	武庫川女子大学大学院　文学研究科 日本語日本文学専攻　博士後期課程修了。博士（文学）。現在、京都医療科学大学　医療科学部　放射線技術学科　講師として勤務している。 主な研究テーマは、小規模単科大学における日本語教育の研究。小規模単科大学における日本語を母語とする大学生を対象とした４年間を通した日本語教育（入学前教育・初年次教育・リメディアル教育・キャリア教育）の方法論・指導論を確立し、高等教育機関における日本語教育研究を促進することを目的とした研究を行っている。

1. 研究の概要

本研究は、小規模単科大学における効果的な日本語を母語とする大学生のライティングスキル向上を目的とした方法論・指導論の確立を目指したものである。2020 年度入学者のライティングスキルの変化を 2020 年度を通し、分析・考察することを研究開始以前は予定していたが、新型コロナウィルス感染拡大のため、2021 年度入学者も含め、対面授業がままならない中、研究を実施した。最初に、入学前教育で利用するｅラーニング、プレースメントテストで入学者の大学入学当初の日本語力を正確に測り、個人カルテを作成するとともに学年全体の日本語力にみえる傾向についても分析を行うことを試みた。コロナ禍であったため、教育課程内教育である初年次教育において、学生間の相互添削、ノートメイキングに特化し、授業実践をもとに効果的なライティングスキル向上の方法論・指導論の確立に向け検証を行った。

2. 研究の動機、目的

749 校ある大学のうち 76.4％の 572 校が入学定員 999 人以下の小規模大学である。（文部科学省高等教育局「平成 28 年度の大学における教育内容等の改革状況について」）さらに小規模単科大学となると人的・物的・財務的資源が乏しく、その中で大・中・小規模大学と同様の学生に対する学習・学修支援を行うのは不可能である。小規模単科大学では大学院が設置されていない大学が極めて多く、大学院生を教育指導員（以下、TA）としたチューター制をとることも難しい。また、図書館の規模も小さく、人員も少ないことから学習・学修支援センターの設置も困難である。非常勤講師の増員も簡単なことではない。そのような厳しい状況においても人的・物的・財務的資源の乏しさを補う情報的資源（方法論・指導論）の充実により、十分

な日本語を母語とする大学生を対象とした日本語教育は可能である。小規模単科大学における日本語を母語とする大学生を対象とした 4 年間を通した日本語教育（入学前教育・初年次教育・リメディアル教育・キャリア教育）の方法論・指導論を確立し、高等教育機関におけるライティングスキルの向上のための日本語教育研究を促進することが本研究の目的である。

3. 研究の結果

研究開始以前の予定は以下の通りであった。教育課程内教育である初年次教育「文章表現の方法」（大学生らしい論理的文章の作成を目指す授業）、「初期演習（2022 年度より「初年次に学ぶ大学でのｽﾀﾃﾞｨ・ｽｷﾙｽﾞ」と名称変更）」（論理的思考・問題発見・解決能力の伸長を目指す授業）での日本語教育を主軸とする。その主軸を支える教育課程外のリメディアル教育（論理的文章の作成がうまくいかない学生のための教育、参加条件の制限なし、参加学年の制限なし）「小論文が書けない人のための小論文講座」、キャリア教育（実社会で活躍するための論理的文章の作成を目指す学生のための教育、参加条件の制限なし、参加学年の制限なし）「就活のための小論文講座」を開講する。教育課程内教育・教育課程外教育を通じ、詳細なカルテを作り、個人や学年全体のライティングスキル向上に如何なる変化や効果があったのか、改善点を含め明らかにする。以上のことを新型コロナウィルス感染拡大以前は、予定していたが、教育課程内教育は課題提出とオンライン授業となり、教育課程外のリメディアル教育とキャリア教育の実施も困難になり、2021 年度ですらリメディアル教育の授業実施回数は 0 回、キャリア教育の授業実施回数は 2 回にとどまった。

そのような状況下であったため、当初予定していた「文章表現の方法」で、学生間で授業内課題（授業外課題とすることもあった）を授業中に交換し、評価を行う、単純な評価尺度による評価のみではなく、評価者には 100 字以上文章作成者にとって建設的助言となる講評を記すことを義務付けるという作業を 2021 年度、完全対面授業で実施した。100 字以上の講評についても全体に見本を提示し、そのうえで必要があれば個人に助言をする。全体の講評だけでなく、一つ一つの問題にも丁寧にコメントを書き込むことを推奨した。**（図 1、2）**その作業を繰り返すことで「他者の課題にコメントを書き込む抵抗感」、「自分の日本語力に対する自信のなさ」、「授業内での作業中に手を挙げ積極的に教員に質問をすることに対する躊躇」を学生のほとんどが克服することとなった。また、「文章表現の方法」、「初期演習」ともにノートメイキング（ノートテイキングの清書を行わせるとともにノートに授業の予習・復習も記し、自分のための 4 年間活用できる美しいノート作りを行っている）を課した。授業中にノートを完成させるのではなく、授業中は傾聴・メモを取る、その後、情報を整理し、必要な事項があれば調べ、書き加えるノートメイキング**（図 3、4）**を学生の多くができるようになった。適宜教員がノートを確認し、助言し、学生のライティングスキル向上に協力した。

コロナ禍という予想もしなかった状況下、研究実施に多大な困難があったが、できることは何かと問い続けた毎日は本研究にとってマイナスにはならなかったと前向きに考えている。

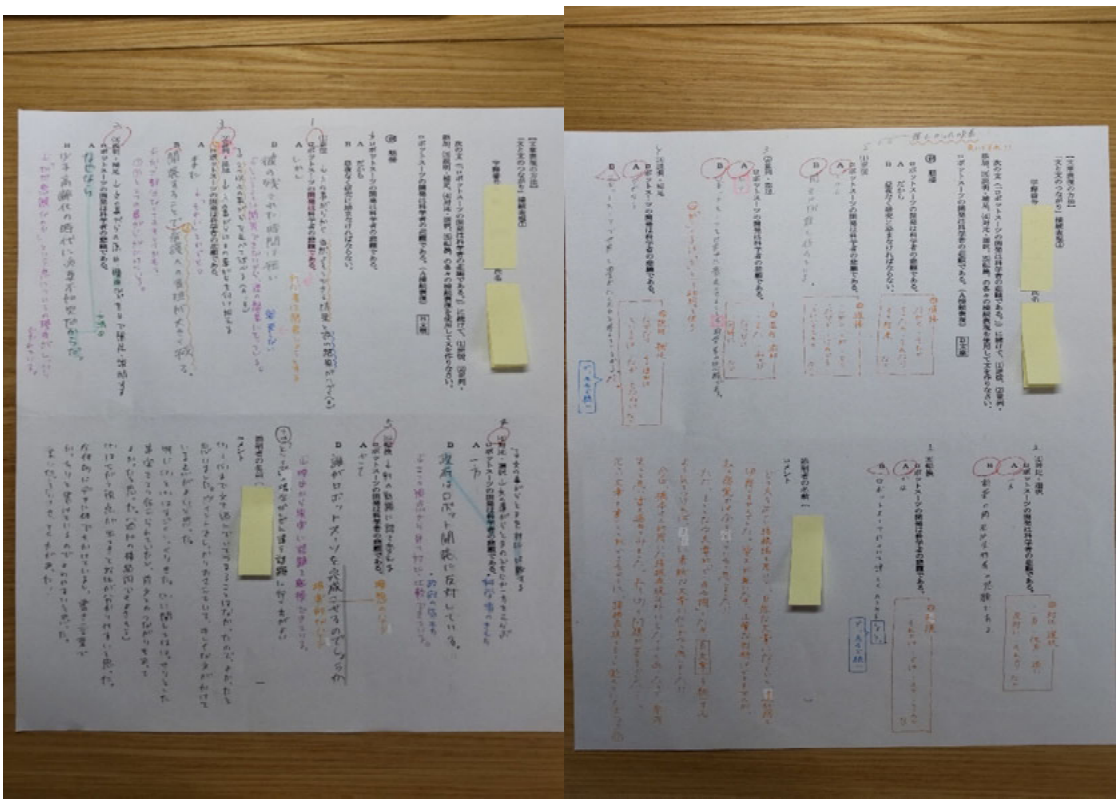

図1、2　「接続表現」の文章作成問題、学生の解答および相互添削

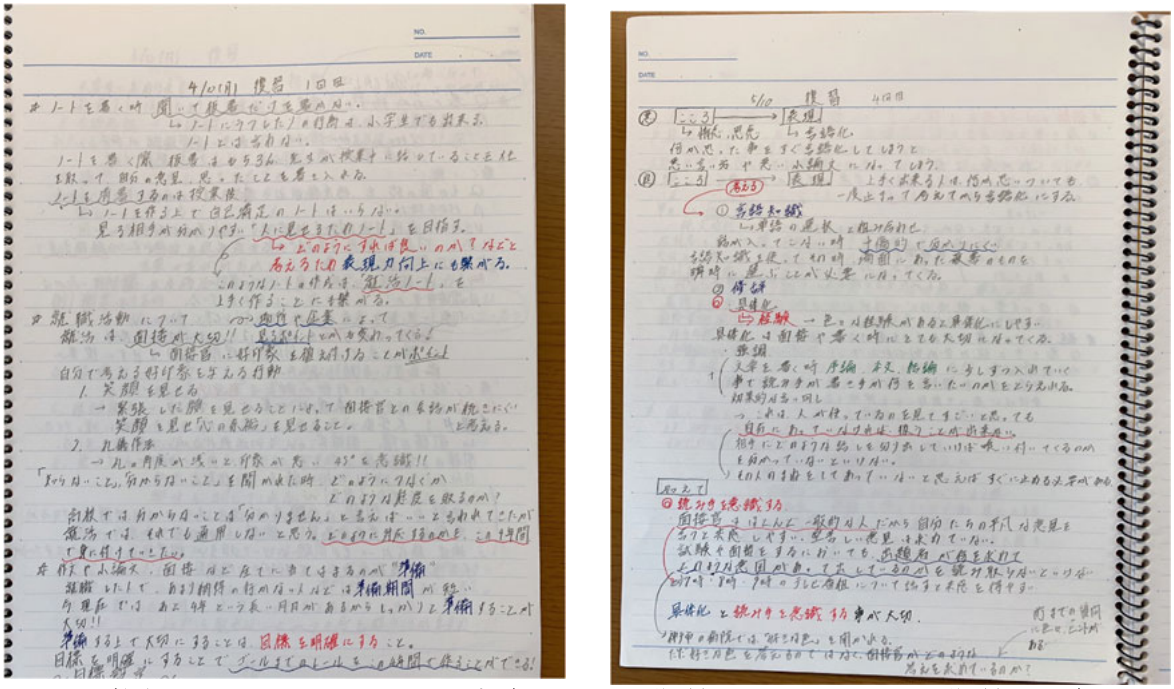

図3、4　学生によるノートメイキング（4月12日　復習1回目、5月10日　復習4回目）

4. 研究者としてのこれからの展望

2021 年度、2022 年度にかけ、コロナ禍におけるオンライン授業と課題の準備に追われた 2020 年度にはかなわなかった結果をだせる入学前教育の充実を図った。総合入試、推薦入試、

一般入試の合格者に『ビジネス文書検定 3 級 受験ガイド』を入学前教育（日本語）のテキストとして送付し、ノート作り、漢字練習の課題を出した（入学前教育期間、全 4 回のノートメイキングの講座を含むオンラインでのやり取りも行った）。大学入学までに生活作文は書いたことがあっても論理的文章（小論文等）を書く機会がなかった、もとより文章の書き方指導・教育を受ける機会がなかった生徒が実社会で通用する文書にふれる機会を作るとともに、学び方次第で検定試験に合格できるという目標を持つことで、学習意欲が高まるのではと考えた試みである。その結果が、入学式後すぐに行った日本語プレースメントテスト（**図 5**）に表れた。

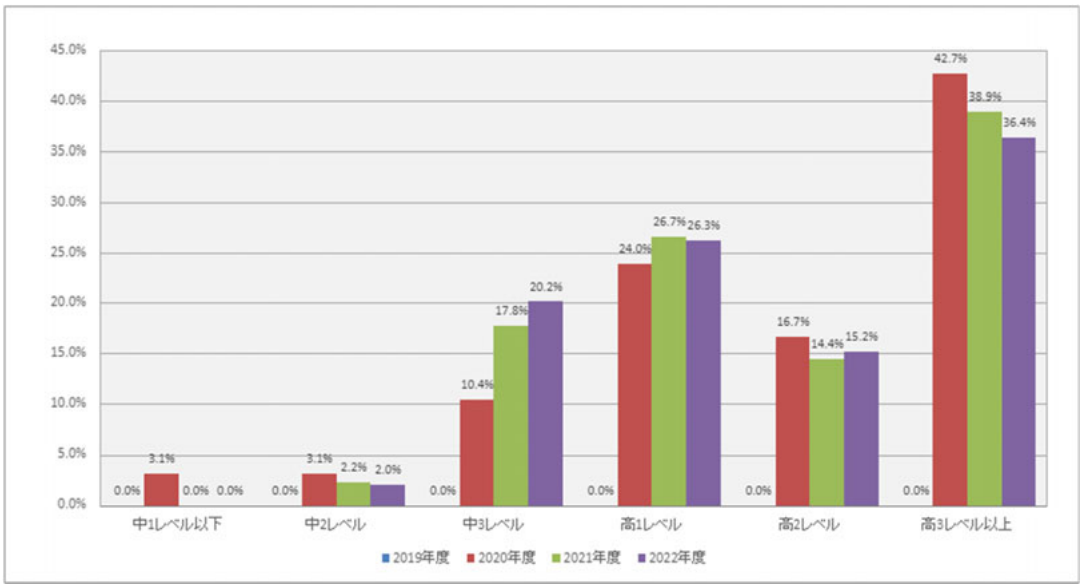

図5　日本語プレースメントテストの結果の経年変化（2020年度、2021年度、2022年度）

図 5 にみられるように 2022 年度入学者に関して中学 1 年生レベル以下の日本語力の学生はゼロ、中学 2 年生レベルの日本語力の学生も過去最少という結果になった。研究者が強く望んでいた入学者の日本語力の底上げが実現できた。今後も試行錯誤し、大学生の効果的なライティングスキル向上の方法論・指導論を確立していきたい。

5. 支援者（寄付企業等や社会一般）等へのメッセージ

2020 年度はコロナウィルス感染拡大により、予定していた研究方法で研究が実施できませんでした。研究成果をあげることが難しいという現実を前に女性研究者奨励金をいただけたチャンスを生かせない悔しさと申し訳なさでいっぱいでした。そのような中、2020 年度　若手・女性研究者奨励金を 2021 年度に繰り越すことを可能としていただき、本当にありがとうございました。再度いただいたチャンスを生かすという決意のもと、今できることは何かということを日々考え、研究を実施し、一定の成果をあげることができました。また、いただいた奨励金をもとにした研究結果から、新たな展開も明確にみえてきました。

また、私事になりますが、2020 年度に双子を出産し、2021 年度に第 3 子の妊娠がわかり、現在出産を控えています。産前産後の体の不調もありましたが、若手・女性研究者奨励金をいただけたという喜びが、研究への熱意を持ち続ける理由の一つとなっていました。苦しい状況でも研究を継続できたのは、ご支援いただきました日本私立学校振興・共済事業団および関係者の皆様のおかげです。心より御礼申し上げます。